

学力研の広場

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

2026.5.9

学力研発行

常任委員長 岸本ひとみ

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

五月のそのゆるみ、想定内ですか？

新年度が始まり、約1ヶ月が経ちました。ゴールデンウィーク明けの教室では、こんな姿は見られないでしょうか。

「なんでそれやらないといけないの?」「別にいいやん」「前はよかったのに」

4月には見られなかったつぶやきや、学習への緩みが少しずつ表れ始める時期です。

子どもたちが教師や学級のルールに慣れてきたからこそ、“試す”姿が出てくるとも言えるでしょう。

だからこそ、この時期の関わりが、その後の学級の土台を大きく左右します。

その場しのぎで対応するのではなく、1年間を見通した学級経営・授業づくりを考えることが大切です。

今一度、「どんな学級にしたいのか」。その問いを、子どもたちとともに見つめ直してみませんか。学力研の先生方とともに、GW明けの実践について考えていきましょう。 古東 秀一

CONTENTS

◇ 特集 「魔の5月」を乗り越える! ◇

5月のやり過ごし方、自分流	川崎 和代・・・2
「魔の5月」を乗り越えるために	吉田 雅直・・・4
『慣れ』と『緩み』にブレない 活性化の波をつくる土台	福島 尚・・・6
「第二の学級びらき」と「漢字チャレンジ月間」で活性化	図書 啓展・・・8
「笑顔の5月」「成長の5月」に!!	山口 左知男・・・10
「魔の5月を乗り越える」	岸本 ひとみ・・・14

◇連載

「どに子も伸ばす」を本気で考える連載89「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ	岡本 美穂・・・16
考える力をつけるための授業の組み立て方③ 「知的好奇心を引き出す授業づくり」	荒井 賢一・・・19
春の春日井集会をふりかえって	山口 左知男・・・21
教科書「を」と「で」で教え・学ぶ社会歴史授業 二 第二時間目「大昔のくらしとくにの統一」	深沢 英雄・・・23
「先生のための学校」 誌上 開校	久保 齋・・・26
局長だより	・・・27
学力研カレンダー	・・・28

5月のやり過ごし方、自分流

川崎 和代

魔の6月とよく言われますが、もはや5月なのですね。6月がいろいろな問題が表面化されますが、魔が忍び寄ってくるのは、たしかに5月からでしょう。そりやそうです。4月、黄金の3日間、1週間を過ごし、GWまで全力でがんばってきました。

身も蓋もない言い方ですが、4月に見せた自分の姿は、教師も子どもも最高の自分の姿です。お互いに最高の自分を出し合っただけです。だから黄金期なのです。その黄金期は、1年のスタートにあたっても大事な意味ある時期ですが、最高の自分って維持できますか？無理です。5月に疲労感倦怠感違和感を覚えるのは当然です。また、学級経営や授業に関しての目標やルールなども、ある程度子どもの実態を考えて構想を立てていると思いますが、子どもと出会う前から、あるいは出会って日が浅い段階で示されています。その実態とのズレも当然出てきます。そういうことから5月はしんどいので

す。(五月病ってよく言ったものです)で、何を言いたいかと言うと実質のスタートは5月だよってことです。今回は、自分の経験や失敗をセキララに、表現もダイレクトになるかもしれないです。それはなぜかというと、読者のみなさんに本当に五月病になってほしくないからです。タイトル見てください。乗り越え方ではないです。やり過ごし方です。省エネです。そして自分流です。あくまで個人のやり方。ベテランの経験豊かな教師のやり方と思わないでください。もつと他の人の意見も聞いて下さい。では！

①ルールやシステムを見直そう

朝の会や、掃除や給食当番、宿題の点検など本格的にスタートさせています。実際やってみてどうですか。うまく機能しているならOK。まだ慣れてないけどだんだん軌道に乗ってくるのもOK。自分が思っていたイメージ通りではないというのは、ちょっと考えて

みましよう。

自分の経験ですが、新年度、当番表を考えて作りました。子どもの氏名を連名で記入したカードをずらすという方法でした。ところがやってみるとうまくいかない。週ごとに一つずつずらすのですが、週末金曜日にずらしているのに、月曜日にずらす子がいたりしたのでしよう。だが、どのタイミングですずすかを徹底していなかったせいかもしれません。とにかく月曜日は当番表の前で揉めていました。自分はそのたびにイライラしていましたが、せっかくなかった当番表だし、指導をきちんとしたら改善するという期待もまだあつて、一年間これで通しました。一年間、月曜日のイライラ、モヤモヤは続く。自分はまだしも、子どもにとってもストレス。本当に申し訳ないことをしました。

で、何を言いたいかと言うと、自分のやり方や方針を貫き通すことが偉いことと思っていたら、自分も子どももエライ目にあうよってことです。五月は、子どもの実態、現状を見て柔軟に対処する時期です。

②ルールを厳しくもしないし緩くもしない

当初は整然としていた教室環境も、学習規律も乱れてきます。それを維持するためにハードルを上げたり新たなルールを付け加えたりしたらどうでしょう？息苦しいですね。

かといってハードル下げると、ちよと風通しよくなりそうですが、今までできていたことすらできなくなりそうですね。そういうもんです。当初に決めたことを、機会を見計らって確認しましょう。あれもこれも言いたいことを抑えて、今一番大事なことを、必要なことを絞って意識づけましょう。例えば、授業中、チャイム着席できてない、忘れ物多い、私語多い、ノートぐちゃぐちゃetc、その中で一番優先したいことに取り組んでいきましょう。一つのことを丁寧に、具体的なステップを示し、こまめに評価しましょう。一つのことを整えば、その周辺のこととも変わってきます。

で、何を言いたいかというところ①と②、矛盾しているのではと思われるかもしれませんが、最初の目標はぶれずに、取り組むポイントを精選したり、違う視点から見たりやり方しようと言うことです。めざすゴールは変わ

らない。コースやペースを状況に応じて変えるということですよ。

③感情と向き合って、感情に支配されない

教師だって人間。子ども、保護者、同僚…人間関係でギクシヤクしたり、好き嫌いあると思います。(私はあります)いいじゃないか！嫌いは嫌いやし、合う合えへんあるし、苦手は苦手や！

無理に、「いやあ、あの人だって悪気ないし」「あの子のいいところを見つけてあげられない私って教師として失格…」そんな風に自分の感情をねじ曲げてしまうのはどうでしょう。自分の感情と正直に向き合います。でも、大人だし、教師だから、当の本人や周囲にはわからないようにふるまいます。そう演技です。

子どもの対応に関しては、お話し行動なのか、屁理屈、反抗、挑発めいた行動も出てきます。そんなときにはありきなどの指導や注意では、「あ、今までのセンセと一緒にや」と思われてしまいます。そんなとき、誰も傷つけることなく、相手を納得

させる対応。はっとさせる対応、もしくは爆笑させる対応ができれば楽しいと思いませんか？私はめったにないですがそんな返しのできたときは、「おつ、今日の私は冴えている」と喜んでいきます。(学力研で、「冴えた返しの名場面集」みたいな物をつくりませんか？ 笑)

まあ、そんなに気の利いた対応はそうそうできるものではありません。そんなときは、軽くかわすようにしています。

「不適切です」「迷惑です」「失礼な！」等短い言葉で。このときも演技です。むちや腹立っても、心がグサツと折れたときでも、平静的な演技をします。なぜなら彼らは、相手の心を傷つけて反応を見たいからです。

で、何を言いたいかと言うと、あなたの周りのやっかいな人間関係も、自分のコミュニケーション力、対応力を磨くよい機会としてとらえて下さいと言うことです。演技として始まったことも、信頼関係が築ける結果になることもあります。

うまくやり過ぎなくて下さいね。

「魔の五月」を乗り越えるために

大阪 吉田雅直

四月、期待と緊張感でいいスタートを切れ
たと思っていた学級で、学習規律が崩れてきた
り、ルールを守らない子が増えてきたり、トラ
ブルが多発したりする「魔の五月」が訪れます。
これは、私の経験上、どんなにいいスタートを切
れたと感じていたクラスでも必ず起こります。
それは、四月の子どもの姿は、一時的な
「仮初めの姿」だからです。

① 学習規律を一から育て直す

新しいクラスになってしばらくは、前の学級
で育ててもらった学習規律の効果が残っている
ので、それに乗っかってなんとか授業が成立し
ます。しかし、それを「かしこい子どもたち」や
「自分の指導力の賜物」と勘違いしてしまい、
学習規律を育てることをやめてしまうと、あっ
という間に効果が切れてしまい、授業が成立し
なくなってしまう。一つ学年が上がっている
のに、前の学年の「期限切れ」の学習規律の残

像にしがみついて授業を成立させようとしてい
る当然の結果だといえます。

大切なのは、その学年に応じた、その学級集
団にふさわしい新たな学習規律を一年間かけ
て一から作り上げていく覚悟なのです。子ども
たちがこれまで積み上げてきた「よさ」や「持
ち味」は大切にしつつ、学習集団としての「弱
さ」や「課題」を把握し、日々の授業の中で、学
習規律を鍛えていくという覚悟がなければ、学
級はすぐに失速し、墜落してしまいます。

私は、学習規律とは「心地よさ」だと考えて
います。子どもたちは「心地よい」と感じるこ
とは、進んで受け入れ、自分たちのものにして
いきます。もし、いま自分の学級で学習規律が
崩れてきたと感じているとしたら、音読や発表
のルール、ノートの取り方や授業の流れなどが、
どの子にとっても「心地よい」ものになっている
か、見直すチャンスかもしれません。

② 教室文化の種をまく

「魔の五月」を乗り越えるもうひとつのキーワ
ードは「教室文化」です。私は学級づくりとは、
教室文化を育てることだと考えています。そし
て、五月は、四月にまいた教室文化の種が、芽
を出し始める時期なのです。もちろん、種をま
いていなければ、あるいは種をまいても水をや
り続けていなければ、芽を出すことはありません
。学級文化とは、クラスの一員としてのアイ
デンティティーの源であり、帰属意識や一体感
を高め、子どもたちに安心感や自信をもたら
します。

私のクラスでは「百マス計算」や「漢字のつづ
き書き」「リズム漢字」「音読」「さかだち」
「なわとび」「体幹トレーニング」「心をみがく
掃除」「牛乳で乾杯」「たよりになるのはおと
なりさん」「百点満点大作戦」「クラス会議」
「感想カード」「読み聞かせ」「一分間スピーチ」
など、様々な実践にみんなで楽しく取り組むこ
とで、日々の授業における学力づくりを学級づ
くりにつなげ、それを教室文化にまで高めてい
ます。四月に種をまき、毎日せっせと水やりを

続けることで、ちょうど学級がしんどくなりはじめた五月に芽を出し始めるので、「魔の五月」を乗り越えることができます。やがて、しっかりと根を張り、葉を茂らせた学級文化は、二学期には色とりどりのきれいな花を咲かせ、三学期には豊かな果実を実らせることになるのです。

大切なのは、日々の授業をなんとなくこなすのではなく、「教室文化を育てる」という意識で取り組むことです。どんなに小さな取り組みも、毎日続けることで、学力づくりから学級づくりにつながり、教室文化へと高まっていきます。学級文化の種まきは、まだ間に合います。まずは、何かひとついいので毎日無理なくできそうなことから、種まきを始めてみられてはいかがでしょう。

③ 保護者とつながる

学級がしんどくなっているときは、保護者との関係もしんどくなっていることが多いのではないのでしょうか。そんな時、子どもたちとの関係を改善することで、保護者との関係も改善されると思いますが、それは幻想にすぎま

せん。保護者との信頼関係は、保護者とダイレクトにつながることでは築くことはできないのです。

保護者とつながる手段として一番いいのは、学級通信です。学年だよりには、学年集団としての事務的な連絡やお願ひしか書くことはできませんが、学級通信には担任としての個人的な思いやこだわり、子どもたちの様子やクラスの出来事などを具体的に書くことができます。私は、子どもたちに毎日書かせている感想カードを載せるとともに、担任としての思いを学級通信で伝えるようにしています。

特に、四月から五月にかけては、テーマを決め、私の教育理念や指導方針、学力づくりと学級づくりへのこだわりについて、熱く語ります。今年度は「音読」「読書習慣」「つぶやき書き」「リズム漢字」「学習規律」「体幹トレーニング」「読解力」「百マス計算」「クラス会議」「宿題」など、様々なテーマで、学力づくりで学級づくりを行い、どの子も伸ばすための取り組みについて発信し続けてきました。その結果、家庭訪問や懇談でもそのことが話題になり、保護者

との信頼関係を築くことができました。

教師と保護者が対立関係にあるのと、信頼関係にあるのでは、教育効果が百倍くらい違います。学級通信を出すことが難しい場合は、「連絡帳を美しい字できちんと書かせる」「毎日宿題を出して、しっかりとチェックする」ということだけでも、よい印象を与えることができます。心地よい「テキパキ感」で保護者の信頼を勝ち取り、保護者としてしっかりとつながることで「魔の五月」を乗り越えてほしいと思います。

このように、「魔の五月」はどんな学級でも起こり得ることですが、その原因を知り、早めに手を打つことで、必ず乗り越えることができます。間違った方向に進みそうになる学級を方向修正するチャンスでもあります。必要以上に恐れることなく、余裕を持って「迎え撃つ」くらいのゆったりとした気持ちで乗り越えてほしいと思います。

『慣れ』と『緩み』にブレない 活性化の波をつくる土台

福島 尚（神奈川県）

新年度がスタートし、一か月。みなさんの学級はどのような状況でしょうか。ワクワクドキドキの出会いから、学級として目指すゴール（目標）を提示したり、係決めをしたり、給食当番・掃除のやり方などを確認するなど、いろいろなことが一通り流れるようになり軌道に乗って来た頃だと思います。ゴールデンウィークもあり、連休が明けたぐらいに芽を出し始めるのが教師と子どももの『慣れ』。それは、持ち上がりだとなおさら出てくる空気感だと思います。『慣れ』をそのままにしておくと『緩み』につながり、そしてそのまま放っておくと『ズレ』へとつながっていきまします。「先生、最初に言っていたことと違う・・・」「急にそんなことを言い始めた・・・」

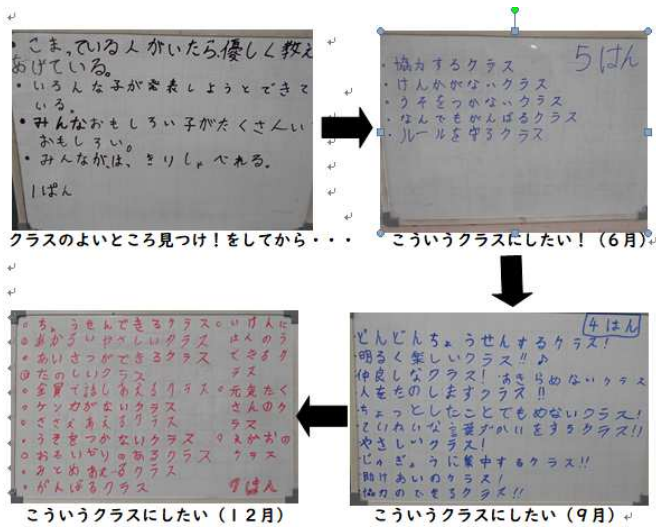
「こうしたい！（勝手なルールをつくる）」などなど、子どもがいろいろなことを言うようになるようになってしまいます。では、そのようなときにどうするか・・・↑

とにかく厳しくする！ではありません。そんなことをしてしまつたら、子どもとの距離が離れていってしまいます。自分は、次のようなことを意識しています。

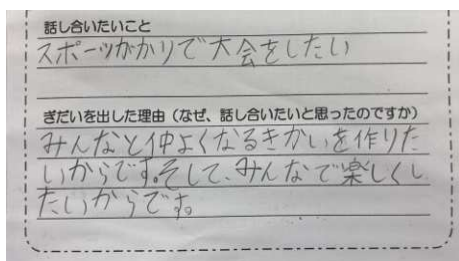
- ① 最初に決めたことを変えない
- ② 常にクラス目標に立ち返らせる
- ③ 係活動の充実
- ④ 想いの共感・共有

① 当たり前ですが、これが一番『ズレ』やすいことだと感じています。自分もクラスが落ち着かなくなつたとき、ここが一番の原因でした。教師も慣れてくると、「このぐらいいいか。」というような気持ちとなつてしまい、少し緩めると段々いろいろなところが緩み始めて最初の約束（ルール）を守ろうとする子とそうでない子が混在し、結局注意することが増えてしまう。そして、文句ばかり言っているギスギスした雰囲気となつてしまい、気付いたときにはもう元に戻すことはできない状態となつてしまいます。話の聞き方・授業前の準備など初めにみんなで確認したことは一年間通して意識させていくことが必要だと思いますが、大切なのは**どうして、そのことをするのか**、というところだと思います。先生に言われたから、ではなくそのことを行う良さを感じさせたいものです。自分たちが意識していることがクラス全体の雰囲気につながっているのだと実感することが大事です。

② みんなで意見を出し合い決めたクラス目標、後半になるにつれて「自分の学級のクラス目標・・・なんだっけ？」というような言葉が出ないようにしたいものです。こういうクラスにしたい！一人ひとりの気持ちがあるもった大事な目標という意識にするためには、定期的にクラス目標を軸にした振り返りを行うようにしています。振り返りを通して、子どもたちのクラスに対する意識と想いを進化させていきます。そのために、二、三ヶ月ごとにクラスの振り返りをし、さらにどの



ようなクラスにしたいかの話し合いを行います。ここはじっくり時間をとります。ただ、振り返りをする際に、〇〇さんの行動がよくないというように【誰が悪い】という方向とならないようにします。そうでないと、特定の子どもたちをただ責める時間となってしまう。マイナスのことばかりでなく、クラスがプラスになる方向に意識と想いが向いていくようにします。(5月はクラス目標の浸透時期、



が役割を持つていて、どの子も目標を持つて、毎日過ごすことになり、注意しなければいけないのは、お楽しみ会などの集会はただ行うのではなく、クラス会議で話し合いを行い、どのような目的のもと行うのかをはっきりさせることです。どうし

③係活動はクラスが活性化につながるものだと考えています。4月に決めた係が常に活発なものとするので、二極化が起きないように、「子どもたちから何か計画したい」というような声が出てくる。「クラスだけでなく他クラスや学年で集会を行えるようになる」など学年の後半には子どもたちの活動の幅が広がっている、という具体的な目標を担任が持ちながら学級活動を進めることが大事だと自分では考えています。そのような姿を実現するために、年度初めから係で行う集会は必ず実行委員を立てて、企画・運営を行うようにしています。常に誰も

てスポーツ大会を行いたいのか、友達の想いを知り、それを実現するためにどのような取り組みをするかをクラス会議で話し合い、しっかりとした目的のもとに話し合いをするので、子どもたちはクラスへの意識を大切にしようとしています。

④取り組みをいろいろと書いてきましたが、一番大事なことは**担任が楽しむ**ことだと思っています。なかなか上手いかわからない、それは誰しも同じです。自分もそうでした。ただ、どの子も教室に来た時に**【楽しい】【嬉しい】**気持ちになってほしい、という想いをもった取り組みはどの子にも伝わっていました。時には、子どもたちに相談してもいいと思えます、すると「先生こうしたらどうかな？」と子どもも一緒に考えてくれます。みんなで考えること、クラスをつくっていくこと、子どもは大人が考えるよりいろいろなことを感じています。子どもたちと想いを共感・共有できる時間をゆっくりとついてもいいのではないのでしょうか。

「第二の学級びらき」と「漢字チャレンジ月間」で活性化

図書 啓展(すしよ ひろのび) 大阪みなみ学力

「第二の学級びらき」を

5月の連休明けは、「第二の学級びらき」が必要な時だ、と言われます。

なぜならば、大型連休の間と学校生活のギャップがありすぎ、疲れが出たり、登校渋り、生活ルールの乱れなどが起きたりしがちだからです。

さらに、そのような状況でも有効な手立てを講じずドラドラと過ごせば、「6月危機」くざわざわとするクラス、トラブルの続出、クラスに指導が入らなくなるに陥る危険性もあります。

焦る必要はありませんが、少なくとも、次のような再提示・確認・話し合いを「先手を打って」することをお勧めします。

○観察

まずは子どもたちの観察です。長い休みで表情や言動、健康状態に何か変化は

ないか、家庭でのトラブルなどが背景にないか。愛情は観察から生まれます。

○「学級目標」の確認

4月に決めた目標を改めて確認し、子どもたちが4月からやってきたことを思い出させ、価値づける。

○「学習ルール」の確認

「聞く」ことの大切さ、学習道具の確認・忘れたときの対応、ノートのとり方、発表の仕方、お隣さんやグループ活動の方法など、実際にやる中で。

○「学校生活ルール」の確認

あいさつ(みんなと)、給食当番・掃除当番・役割や活動の確認、係活動の再スタート、安全・安心なクラス・学校のために必要なこと。

など多岐にわたりますが、「学習ルール」「学校生活ルール」は実際に活動を進める中で確

認・指導していきます。

イメージとしては、転校生が来て、その子に「一から教えるようにみんなで確認してくださいよ」というスタンスが楽しいです。

新たな学習活動でブームを作る

「漢字チャレンジ月間」

クラスや学年を活性化させる「攻め」の学習活動をつくることも、「5月危機」を回避する上で有効です。

勤務校では、全校で5月を「漢字チャレンジ月間」と設定して6年目になります。

毎年4月に各学年で計算・漢字の実態調査をしています。その中で、毎年課題になっているのは「既習学年の漢字定着率が低い」ことです。とりわけ、前学年の漢字は未定着な子どもが多いのが実態です。

そこで、「漢字チャレンジ月間」です。

ねらい

- ① 漢字書字力テスト結果を受け、前学年の漢字の読み書きに力を入れる。
- ② 漢字への関心意欲を高める。

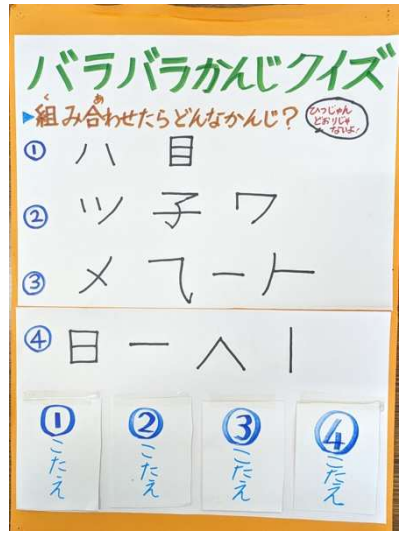
- ③ 当該学年の漢字について、一学期分の漢字がすらすら読めるようにする。
- ④ 語彙力を高める。

方法

- ① 「リズム漢字」で前学年の漢字が読めるようにする。(さかのぼり学習)
- ② 「読み上げ漢字」で当該学年の一学期分の漢字がすらすら読めるようにする。
- ③ 「読み上げ漢字」「リズム漢字」「読書」「意味調べ・辞書引き」などにより、語彙力を高める。
- ④ 漢字クイズなどの掲示物を工夫する。(係)
- ⑤ 漢字プリントを活用する。(係が提供)

学力実践の定番である「リズム漢字」や「読み上げ漢字」(鈴木基久先生開発)を活用しています。

「リズム漢字」(一部改訂)は、画用紙の表に「前学年分のルビあり」、裏に「ルビなし」を印刷して音読しやすいようにしています。例えば、4年生は「3年生」のリズム漢字の音読からスタートするわけです。



「寒波流水銀世界、期待軽重全階級…」

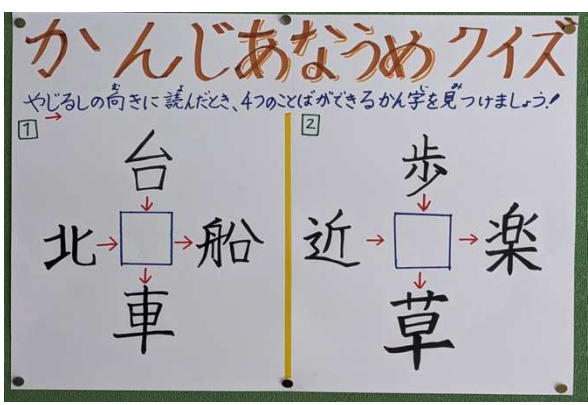
教室から「リズム漢字」の音読が聞こえてくるのは微笑ましいです。

「ルビなし」に進んで、お隣同士聞き合ったり、「読み上げ漢字」でお互いに聞き合い確認し合ったりする営みはクラスを活性化させます。頼りになるにはお隣さん、の実践です。

「できた！ わかった！ つながった！」の学力づくりはまさに前向きなクラスづくりへとつながります。

写真のように「係」を務める私は、漢字の掲示物を作って掲示板に貼っています。

朝、登校してきた子どもたちがそれを見てワイワイとやっています。



5月には「漢字」が先生方の中でも話題になるし、子どもたちの中でもまさにブームとなります。

もちろん、クラスで始めるのが第一歩です。大切なことは、5月には「攻め」の新しい学習活動をスタートさせて、ブームを起こし、前向きなトーンをクラスに作ることです。そのことが結果として「5月危機」を回避することにつながります。

「笑顔の5月」「成長の5月」に!!

春日井学力研 山口左知男

『魔の5月』を乗り越える!というテーマをいただきました。私が教師になった頃は、6月、11月、2月に学級に危機が訪れると言われていました。それがいつの間にか「魔の5月」。先日のサークルの例会では、ベテランの先生たちが「4月からおかしい」と言っているという話が出ました。「危機」がどんどん早まってきているというのでしょうか。

5月は子どもたちが動くときです。良くも悪くも子どもの本性が出てくる時です。ただそれは個人差があります。動き方も本性も多種多様になってきています。「4月からおかしい」というのは、4月から本性が出始める子が目立ってきたということでしょう。ということとは、私たちのクラスづくりもそれを見越したものににならないといけないということなのでしょう。

私は40歳で小学校に転勤してから半分以上単数学級を受け持ちました。単数学級

はクラス替えがなく担任の先生だけが変わる、問題はすぐに出てきます。また何度も学級崩壊、半崩壊のクラスの後を持たせてもらいました。そうなる「魔の5月」どころではありません。4月の始業式からいきなり「魔」の毎日が続きます。クラスづくりは急務です。その頃4・5月に毎年取り組んでいたことを少しお話しします。

まず、4月前半は、教師が「ノセる」、子どもが「ハマる」、そして、クラスが動く、これを一番考えました。ノセられそうなこと、ハマりそうなことを毎日「必死の笑顔」で怒涛のようにドンドン取り組みました。学習の軸は、音読・群読、まずはみんなで力いっぱい声を出すことです。始業式から始めます。朝の会は、ことば遊びの詩の群読から。谷川俊太郎さんのレパートリーにお世話になってきました。国語は毎日漢字三字勉強、リズム漢字、社会は「かつ

とばせ都道府県」、算数や理科も教科書音読とにかく一日中みんな声を出すのが当たり前状態をつくる。幸いなことに崩れたクラスは声を出すのは得意ですから、これは意外と簡単です。計算はまずは百マス・基本割り算で「計算ずもう」、体育は「動物歩き」に鉄棒アラカルト、グループドッジに立ちブリッジ。この調子でみんながどこかにハマる状態をつくっていきました。子どもたちがハマってきたら、教師は「全力で」「全員を」ほめる、そして、子どもが目いっぱい喜んで、教師と子どもが結びつく、という塩梅です。漢字当番、算数当番など活動も全部子どもに任せていきました。子どもをほめて結びつくための「武器」は学級通信「やろまいか」。基本毎日発行しています。特に4月、5月は何よりも「やろまいか」づくりを優先します。「さよなら」して子どもが帰った後、教室で今日一日子どもがきらつと光った瞬間はないかと必死で思い出します。少人数学級では、必ず週に1度や2度は全員の名前が登場し主人公の号ができるようにしました。自分の名前が載っていれば、子どもは進んで親に見せます。親にも広まります。『やろまいか』は我が家の夕食の一品です。「そんなふう書いて

くれたお母さんもいました。そんなこんなで毎朝だれかが「やろまいか」を読んで歓声をあげたり、にやっとしたりする瞬間をつくることで子どもとの関係性もちよつとずつ深まっていきます。これが危機を乗り越える力にもなります。

次に、子どもと教師の「合言葉」です。崩れた学級は当然基本的な生活習慣、学習習慣ができていません。まず話が聞けません。話を聞かせるには、まず今やっていることを全員が「おわる」こと、次は一斉に「はじめる」こと。次は素早く「切り替える」こと、相手を「目で」見て聞くこと、さらに集中力をつけるために「聞いて書く」こと、と段階を追って一つずつ自覚させていきました。はじめの一週間は「おわる」だけ。速い子、続けている子、できるようになった子をほめてほめまくります。とても喜びます。毎時間「生活ずもう」（星取表〇●）に取り組ませ帰りの会で発表しました。一週間たつと私の「おわる！」の一言で全員が終わるようになりました。こうした取り組みは必ず長くても一週間で終わります。次週は「はじめる！」。これは生活リズム、学習リズムの超スモールステップで

すから、次からは言われなくても自覚ができます。一つやれるようになると自信がつき、次からは到達も早くなります。「おわる」「はじめる」「きりかえ」「目」「ちようき」と合言葉が増えていきました。この積み重ねで、4月終わりには私の話を聞くようになりました。無論授業内容の充実が一番ですが、形から入るミニ生活指導も重要です。クラスの雰囲気が変わります。

三つ目は、子どもの思いや隠れた声をつかむことです。そして、表に出してみんなで考えていくことです。4月後半からの本丸、一番の核です。特に単数学級では、子どもの思いや声を早くつかむこと、そして、それをもとに子どもたちが自分たちの今を見つめる目を鍛えることが何よりも重要です。5月の連休前後、必ず問題は出てきます。表面化しなければ陰で進んでいきます。朝一番に「先生、〇〇君が泣いています」「バカ、死ぬ、キモイと言われました」「〇△さんに陰口を言われました」「机の上に置いておいた消しゴムがなくなりました」「貸してあげたペンを返してくれませんか」「殴られました」「一枚拳に暇がありません。こういう分かりやすいトラブルもあれば、落書きやノ

ート破りのような陰湿なものも出てきます。授業も落ち着きがなくなってきました。こちらは「さあきたか」「よしいくぞ」です。事件は子どもたちが自分たちを見つめ直すチャンスです。

①いくつか事件が表に出てきたときに毎年取り組んできたのが、「チクチク言葉（行動）、ふわふわ言葉（行動）」の学習会です。子どもたちにこの1か月自分が言われたりされたりしてグサツときた言葉や行動を全部書いてもらいます。名前などは自分の書きやすいように好きにさせます。次に、自分が言われたりしてもらったりして嬉しかった、癒された言葉・行動を書かせます。全員が書けたところで一人ずつ立って読んでもらいます。子どもたちが読めそうもない雰囲気なら、集めて先生が読みます。まずチクチク言葉・行動から。子どもから出たものを私は順番に書いていきます。黒板いっぱいになります。書き終わったら全部読みます。「どう思った?」「これ言われたときどんな気持ちだったんだろうね」ぐらいで、あまり突き詰めた問いはいりません。黒板いっぱいを書かれたグサツときる言葉や行動に子どもたちは押されています。教室は

シーンとしています。チクチクだけでまる1時間かかります。しつかり声に出せた子もいればそこまですきなかつた子もいます。でも、言葉にできた子は随分すつきりするし、言えなかつた子も「みんな同じことを思っているんだ、次は自分も」と感じることはできません。そして、何よりも、チクチク言葉やふわふわ言葉が教室の課題になり合言葉になります。「チクチク言葉よ、さようなら」「ふわふわ言葉よ、こんにちは」です。帰りの会で「今日ちくつとやつちやつた人?」「やられちゃった人?」「今日のふわふわ言葉は?」日直が聞きます。チクチクがなくてふわふわがたくさんあれば「今日はふわつとデーでした。拍手!」となります。子どもたちの意識は明らかに変わってきます。これは2学期にも3学期にもやります。ちなみに子どもたちが一番好きなふわふわ言葉・行動は、毎年必ず「ありがとう」でした。自分がしたことに相手が誠意をもって応えてくれる、そして自分も応え返す。子どもたちが求めているのはそうした仲間関係です。

②この頃初めての班替えがあります。班替えのときに必ず行ったのが「となりだった

(あるいは同じ班だった)○○さんへというメッセージカードづくりです。となりだった○○さんにお世話になったこと、「すごいなあ、私もまねしたいなあ」と思うことと自分の気持ちを具体的に書いて、班が解散する前に、立って読んで相手に渡します。最初は「ええっ!」「やだあ!」と恥ずかしがつっていた子どもたちも、順番が進むにつれて緊張した面持ちで待っています。自分に好意的なメッセージを読んでもらおうと、テレながらとても嬉しそうでした。そんなことあったつくと忘れていたことを思い出したりして、ちよつぱり自己肯定感が膨らむときでもあります。書くほうにとつては、きつちり相手を見つめ直すときであり、1か月生活を共にしてきた相手に口でなかなか言えないことをちゃんと表すときでもあります。メッセージを書く側にとつてももらう側にとつても大切な瞬間です。だんだんと回を追うごとに楽しみにしていきます。ちなみに、特に問題の大きかったクラスでは、「班替えアンケート」もとりました。とげの大きなクラスでは、まずとげを少しずつ丸くしてとげがぶつからないようにして穏やかな1日が送れるようにしてあげることが必要です。「だれに勉強を教えてもらい

たい?」「困ったときに頼れる人は?」「今の自分ではどうしてもけんかや言い合いになつてしまう人、何とも気の合わない人は?」「理由もしつかり書いてもらいました。まとめる私は少し大変でしたが、大学級では、大人数の子どもたちの人間関係がよく分かり面白かつたし、何よりもクラスは落ち着きました。先生の意図が仲間を離すことではない、自分たちを守ってくれることだと気付くと心を開いてきました。クラスづくりが進んでいくと、2学期には「先生、もうアンケートなしで大丈夫!誰と一緒にやつていける」という声が出てきました。一人でもまだやつてほしいという声が出ている間は続けましたが、「2学期終わりごろにはいつも一人もいなくなりました。」

③月が替わる時には、必ず「〇月をふりかえつて」カードを書いてもらいました。この1か月自分ががんばつたな、成長したなと思う点、嬉しかつたこと、まだまだだなと思うこと、翌月にがんばりたいことなど、何も注文していませんが、不思議なことに書くたびに詳しく内容が具体的にいいものになつていきました。毎日の「成長ノート」や「今日の私」カードに取り組んだりもし

「魔の5月」を乗り越える！

いろえんぴつ 岸本 ひとみ

罪作りな5月運動会

今年、初めて5月運動会の学校に変わりました。4月はいつも通り、実態を調査して、初動の対策を立て、少しずつ落ち着いて授業ができるようになってきました。ところが、GW明けから、運動会の練習が始まってしまっています。

4列に並ぶのに時間がかかったり、説明を聞いて、自分の動きをイメージしたりすることが苦手な子どもたちです。全校朝会でも、交通安全教室でも、並ぶのにとても時間がかかりました。嫌でも注意を受ける回数が増えてしまいます。

「昨日の自分に勝つ！」が大好きで、毎日読み上げ計算をしたり、リズム漢字の小学年版を音読したりして、再学習をしながら、自己肯定感を育てつつあるこの時期に、運動会練習とは、トホホです。

1年生などは、まだ、毎朝泣き別れをし

ているお子さんもある状況です。暑さ対策とはいえ、学級づくりや授業づくりで、一番のポイントになる5月に運動会って、どうなのと、疑問だらけです。

春運動会の学校のみなさんは、毎年こんな思いをされているのだということがよくわかりました。

「魔の5月」は6月の予兆

6月危機とはよく言ったもので、5月の学級づくりや授業づくりがうまくいかない、と、6月にはあちこちで課題が噴出してしまいます。運動会練習をしながら、同時進行で授業づくりをするのは、なかなか……。とはいえ、そんな学校が全国的には増えていることも考えると、手立てを講じる必要があります。

今年、以下のように考えました。

OGW明けは再度仕切り直し

当たり前のことですが、5連休明けの子どもたちは、なかなか生活リズムが元に戻りません。4月末に、こんな事件がありました。初めて6時間目を経験する日のことでした。何と！6時間目の始めに、雷鳴が聞こえてきて、豪雨と強風に見舞われたのでした。

当然、子どもたちは、

「雷や！」

「すごい雨。帰れるかなあ。」

と口々に。もちろん授業どころではありません。

仕方なく、作文の時間に切り替えて、題名を「雷が聞こえた」にしました。

たぶん、同様のことが、7日と8日、それから週明けの11日には起きることでしょう。4月末にはできていたのに、と思わず、子どもの様子を見て、柔軟に対応すること、原則を外さないことがポイントになります。

○運動会が終わるまでは新しい取り組みはしない

3年生なので、自学ノートを始めたばかりです。内容は、まだまだ低学年の生活科カードみたいなものもあります。運動会が終わるまでは、質の向上を求めず、ノートを使うことに慣れるようにします。

社会科と理科のノートについても同様です。初めての教科なので、丁寧にノート指導をしたいところですが、この2週間は実践が停滞しても、「忍」の一字と決めました。

○運動会練習が過度に負担にならないように気をつける

これが一番難しいかもしれません。80m走と、ソールン、タイフーンの3つをこなさなければなりません。幸いなことに、中学年団の4年生は去年も同じことをやったという経験があるので、それを見習って進めていくことができそうです。

また、「けがをさせない、無理をさせない。」を、目標にすることも確認できたの

は、とてもよかったことでした。

何といつても、自分が熱くなってしまわないように気をつけないといけないですね。

「みんながすまいル」をめざして

なかなかステキな学年目標です。この学

年の子どもた

ちは、アイデ

イアはいつぱ

い持っている

し、楽しいこ

とは大好きと

きています。

それを、クラ

ス会議で最大

限引き出して

いきたいと考

えています。

まずは、運

動会までの2

週間、この

目標を掲示物

として制作してくれる「会社」を設けていきたいと考えています。

係活動や会社活動で、

「うまくいかない時は、解散してもいいし、メンバーが加わったり、卒業したりして

もいいんだよ。」

というと、目がテンになっていました。

「先生、一人に2つ以上の仕事してもいいんですか？」

「もちろんですよ。でも、あまり忙しくな

るのは、自分が困ると思うので、やって

みて無理だったら、相談してね。」

と言うと、これにもびっくりして口をあん

ぐりしていました。4月当初は、丁寧語で

たずねられなかったお子さん方ですが、こ

れだけは1カ月で定着したようで、たずね

方も上手になりました。

そのうちに、ゲーム会社やニュース会社

と同列で、社会科会社や漢字会社ができる

て、漢字ミニテストの練習を担ったり、社

会科クイズを作ったりしてくれるのではな

いかと期待しています。



「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

4月に異動し、担任としての務めに加えて大きな役割を引き続き担うことになった。

その責任の重さを実感するほど、「失敗は許されない」という怖さも確かにある。

異動してからの毎日は、新しい環境の中で、いろいろな先生との会話を大事にしなごら過している。6年担任として、子どもたちを卒業まで導く責任に圧倒される瞬間もあり、「自分に務まるのか」という不安がある。失敗を恐れる気持ちも、これまで以上に強くなっている。それでも、私が大切にしてきた「目の前の子ども」という言葉が、いつも立ち返る場所になっている。

子ども一人ひとりの姿を丁寧に見取り、その学びに寄り添う営みこそが、学校づくりの根幹であると感じている。6年生が学校の顔として育っていく姿は、学校全体の文化をつくる力にもなる。だからこそ、日々の小さな積み重ねを大切にし、学年だけでなく学校全

体を見渡しながら取り組んでいきたい。

これまでの経験や出会いに感謝する場面がたくさんある。不安も期待も抱えたままだが、6年担任としての責任を胸に、「これから子どもたちとともに学び続ける教師でありたい」と思っている。新しい環境でも、子どもたちの学びと成長のために、自分にできる最善を尽くしていきたい。

■1年生の連絡帳を通した

子ども・保護者との関わり

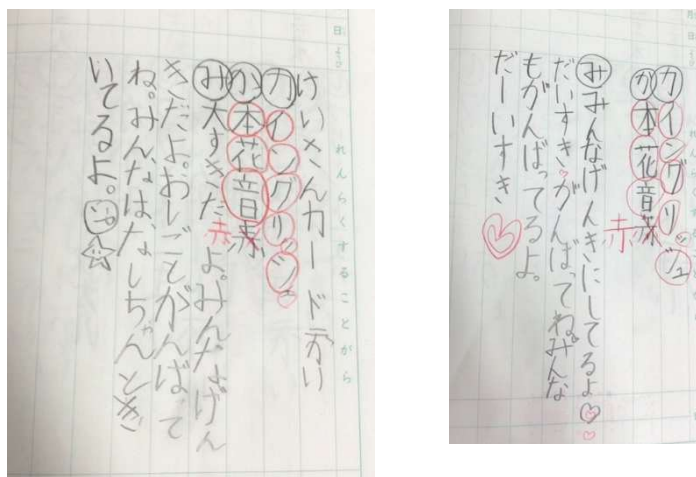
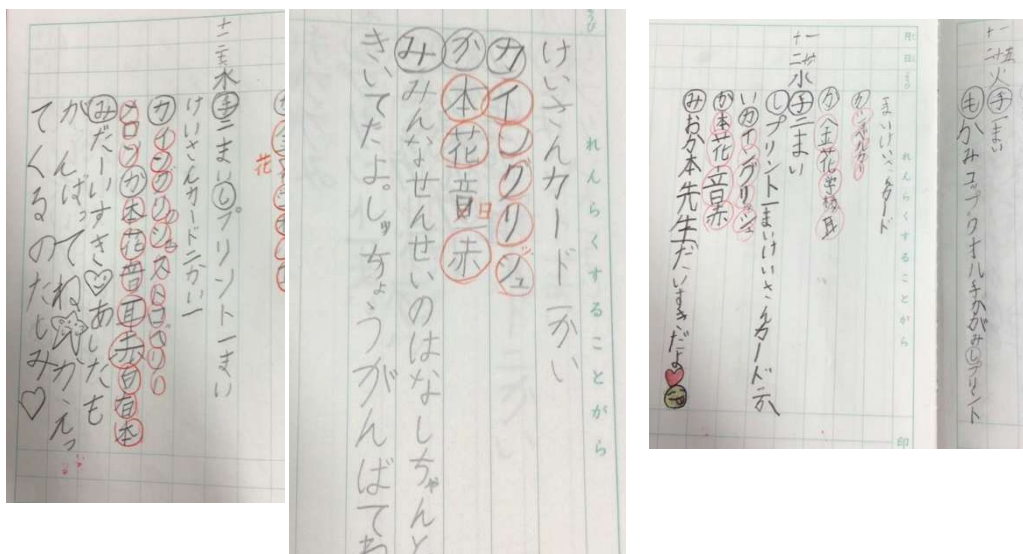
1年生の連絡帳は、子どもだけでなく保護者の方も日々よく目を通してしている。4月当初は、ひらがなの練習から始まり、カタカナ、数字、今日の給食、学習した漢字、そして「今日のこと」「伝えたいこと」を短く書く日記へと、少しずつ書ける内容が広がっていった。書けることが増えるにつれ、子どもたちは私に向けてメッセージを書くようになっていなり、そこに保護者の方からの「メン

トが添えられることも増えていった。

このやり取りを通して感じたのは、保護者との関係づくりも子どもと同じで、「できるようになったことを一緒に喜び合う」と「が何より大切だということである。子どもが書けるようになった文字や文章を保護者と共有することで、家庭と学校が同じ方向を向き、子どもの成長をともに支える関係が自然と育っていった。

また、手書きの学級通信を読んだ保護者の方から、「子どもに習字を習わせたい」と言いましたという声をいただくこともあった。教師の発信が家庭の学びの環境づくりにもつながり、学校と家庭が互いに影響し合いながら子どもの成長を支えていることを実感した。

連絡帳は単なる連絡手段ではなく、子どもたちの学びの足跡であり、保護者との信頼関係を育む大切な媒体である。これからも、子どもが書くことを楽しみ、保護者が成長を実感できるような関わりを大切にしていきたい。



- 書く力を育てる段階的な支援
- ① ひらがな・姿勢・鉛筆の持ち方からの
丁寧なスタート
書くことに負担を感じる児童も多いため、姿勢・鉛筆の持ち方・ゆっくり丁寧に書くことを徹底し、書く力の土台を築いた。
 - ② ノートづくりと視写から「書く体力」を育てる
6月は短い言葉の視写から始め、7月には一文で書ける児童が増えた。2学期には「視写ブーム」が起こり、物語文や説明文を自由帳に写す姿が広がった。書くことが学級文化として根つき始めている。
 - ③ 振り返りの書き方を段階的に育てる
 - ・ テーマを決めて書く
 - ・ 題名をつける
 - ・ 一文で表す
 - ・ 「弟や妹に説明するように書く」
 など、条件を与えて書く力を育ててきた。児童の書いたものを板書してモデルにすることで、「真似して書く」経験を積み、やがて自分で書けるようになってきた。

知的好奇心を引き出す授業づくり

知的好奇心とは？

「知的好奇心」は、そのままでは辞書に意味が載っていない。「知的」と「好奇心」を組み合わせた熟語のようだ。

Googleで、「知的好奇心とは」で検索をかけてみた。

Aさまざまモノやコトに対する「知りたい！」という好奇心に、知識や理解を深めたという気持ちが加わったもの。

(ヒューマンアカデミージュニアより)

Bまだ知らないことや理解できないことに対して、積極的に関心を抱き、探求しようとする心の働き。(POPY.JP)

C「知りたい」「これは何だろう？」と思う意欲や興味をもつ力のこと。

(進研ゼミ小学講座)

D自分が興味・関心を持った物事について、より深く知りたいと思う気持ちや、欲求のこと。(NITTD「E」)

授業で求める「知的好奇心」を上の上の四つから選ぶとしたら、どれだろうか。

Bの「まだ知らないことや理解できないこと」に関心を抱き、探求しようとするのは、レベルが高すぎると思うので、これは違う。Dの「自分の興味・関心を持った物事」にはばかり学校の授業で出会えるわけではないので、これも違う。

Aを求めたいけど、Cぐらいができればいいなあ、という感じである。

知的好奇心を引き出す授業づくり

知的好奇心を引き出す授業をするための原則のようなものを六つ考えてみた。

- ① 既有知識（知っていること）を出させる。
- ② 資料や現象から、分かったこと・気がついたこと・思ったことを見つけてさせる。
- ③ 上記のものを質問させ、分類させ、抽出させる。
- ④ なぜ（理由）を考えさせる。
- ⑤ 予想させ、事前練習させ、活動させる。

⑥ 決めごとを守らせ、限定的な自由を与える。

①を多く出させるために、まずは基準を示す。三個書いたら三年生というように。そうすると、三年生レベルはとりあえずクリアしたいと思うようになり、さらにもっと多く出そうと思う（はず）。これは②を見つけてさせるときも同様である。

①と②を発表させることで、学級内に既有知識の量の違い、質の違いに子どもたちは気づくだろう。多くの子が知っている（見つけた）ことを私も知っている（見つけた）ことに安心し、誰も知らない（見つけていない）ことに刺激される。誰も知らない（見つけていない）ものを発表できることは、本人の優越感につながるけれど、③のように質問される危険性もある。ただ、質問され、それに答えたいという欲を持っている子もいたりもする。

①②③④で、授業づくりができるわけだ。

沖縄について知っていること（五年社会）

「今日から、あたたかい地域のくらしとして、沖縄県のことを学習します。」

【板書】沖繩について知っていること

「例えば、何を知っていますか。」

・あたたかい。 ・米軍の基地がある。

「沖繩について知っていることをノートに箇条書きをします。番号をつけて、五つ書けたら持つてきましょう。」

持つてきたノートに○をつけ、重複のないように、番号を指定して、板書させる。

・サトウキビがある。

・サンゴがいっぱい。

・海がきれい。

・オニヒトデが多く発生してる。

・一人が使える水の量は少ない。

・パイナップルが有名だ。

・気温が高い。

・雨がふりにくい。

・シーサーやエイサーが有名。

・ゴーヤが有名である。

・言葉が少しなまってる。

・アメリカの軍用地がある。

・台風がよく来る。

・海水を飲み水にしている。

・春でも海で泳げる。

・雪がふらない。

・たくさん雨がふる。

・さとうきびやパイナップルを作る。

沖繩について何も知らない、という子がいれば、教科書や資料集を見てもいいことを告げておく。

発表のあと、沖繩に行ったことのある子がいれば、そのときの体験を出させる。

知っていることの検討・証拠探し

出された「沖繩について知っていること」から、いくつか検討していく。

「中山さんは「台風がよく来る」と書いています。台風がよく来る証拠を教科書や資料集から見つけます。始め。」

地図帳の地名探しと同じやり方で、見つけた子から立っていく。クラスの半数以上が見つけたら、一人を指名する。

・教科書、24ページの「地方ごとの、台風が近づいた回数」のグラフです。

・資料集26ページの「台風が来た数」で分かります。

「まだ、見つけた人？」

・教科書24ページの下から4行目に、「台

風の近づく数が地方に比べると多く、

大雨がふることもあります。」と書いて

います。 (以下、略)

「城野さんは「雨がふりにくい。」と書いて、池上さんは「たくさん雨がふる。」と

書いています。どっちが正しいのでしょうか。雨が多いか、少ないかで考えます。

どちらかを選びましょう。」

ノートに「雨がが多い」か「雨が少ない」かのどちらかを書かせる。

挙手で、それぞれの人数を確かめる。

【板書】雨がが多い。なぜなら…。

雨が少ない。なぜなら…。

「ノートに、雨がが多い、雨が少ない、それぞれの理由を書きます。」

数分後、板書した形式で発表させていく。

・雨がが多いです。なぜなら、台風が多く来るからです。

・雨が少ないです。教科書25ページに、

「家の屋根にタンクを置いて、水をためておけるようにしています。」と書いて

いるからです。 (以下、略)

春の春日井集会をふりかえって

春日井学力研 山口左知男

三月二十九日、私たち春日井学力研のホームグラウンド、レディヤンかすがいで春の集会が行われました。40名の方の参加でした。目標とした参加者数に少し（いや、かなり）届かなかったのは残念ですが、常任の皆さんの応援もあり、それなりの満杯感で集会を行えたことは喜んでいきます。先生方のご協力、ご支援に深く感謝いたします。何とか任を果たすことができホッとしております。

今回の集会依頼をお受けする際にサークル全員で確認したことは、集会の学びの内容です。前回8年前の集会では、学力研の実践の高みを吸収し地域に広げることが目標に取り組みました。今回は、その後各自が積み重ねてきたものをまとめ発信していく場にあることをメインに据えました。

現職の学級担任が各自の持ち味・独自性を生かしながら、直近の実践の中で一番話

したいことをまとめるということで、昨年末から例会の中で各自のレポートを検討してきました。当日の報告の内容は、①語彙の習得の重要性をもとに、具体と抽象の読み取りを大事にし、説明的文章の構造を子どもとともに読み開いていった国語の実践、②困難なクラスの状況の中でも、「どの子ども伸びる」という確信をもとに、原則と目の前の子どもたちとの間で学力づくり・学級づくりの「切り口」を模索した実践、③分数や数直線など問題理解の入り口で壁に当たる子どもたちに、可変性のある実物教材を通して楽しく驚きながら抽象の世界や異なった課題の共通性に気づかせていく、子どもの目線に合った教材づくりを進めた実践、④問題の多い6年生の中で、クラス会議など日常の何でも話し合う関係づくりが集団の合意形成の力を高め、自分たちで見つけた課題に自主的にクラスが取り組むようになる姿を描いた対話

を通して子どもを育てる実践、⑤レクを紹介したコミュニケーションの中で一人ひとりを肯定し子どもたちのこわばりをほぐし、子どもたちが心を開いて指導を受け入れていく様子を参加者自信が体験していくという学力を支える土台作りを主眼にした実践と個性豊かな持ち味が表れたものになりました。見える学力、見えない学力の本質に少し近づけた報告になったように思います。参加者の感想もとても肯定的で、今後の自信になるかと思えます。

「国語を学ぶことを少しでも楽しませるような工夫がたくさんありました。教師自身が教材をおもしろいと思つて初めて子どもたちに国語のおもしろさが伝わるものが分かりました。小さいころからの積み重ねが中高で役立ったので、国語の授業は本来に将来のためになるものと改めて感じました。」

「途中からの学級担任としてのご苦労に頭が下がります。お疲れさまでした。私の学校でも、先生のお話に出てきた粗暴で人間関係づくりが上手でなく難しい子が

いて悩んでいます。先生のお話から学んだことを生かして、来学期からの指導・支援が少しでもよいものになるよう努めていきたいと思います。」

「算数の学習の中で分かる！楽しい！となるために教具を準備することがとても大切であると気付かされました。大人が見てもワクワクしたので、子どもが実際見ると、学習したい!!という気持ちになるんだろうなと感じました。ぜひ真似したいです。ちよつとした工夫が子どもの意欲に大きくつながることを学ぶことができました。」

「クラス会議を通して、対話すること、自分たちで考え合意形成できるまで話を進めることの大切さを知りました。次年度のクラスでチャレンジしたいと思いました。」

「仕事の中ですぐ取り入れられそうなレクとかがあり、楽しい時間でした。午後のラストでしたが、元気いっぱい楽しくあつという間でした。クラスの子どもを見る目、全体を見て子と子をつなげる技、と

つても参考になりました。」

岡本先生のお話から学ぶところも大きく、参加者からも様々な反響がありました。「岡本美穂先生の迫力がすごいなあと思いました。70代を過ぎてから、初めての参加でしたが、今の現状に先を未来を感じられました。」「国語の力を大切にしたい、教材研究をもっともつとして授業に臨みたいと思いました。一つ一つの基礎を大事にしていきたいです。」「周りの環境、変化、人間関係などに振り回されて、自分が自信を無くしていたことに気づきました。見失っていた何かに気づけました。来て良かった!!」「岡本先生のお話を聞いて、ICTや個別最適な学びなど新しく出てきたものに揺さぶられ、自分が本当に大切にしたいことを見失いそうになっていることに気づかされました。子どもたちのために何を大切にしたいか改めて考え、今日お聞きした実践も参考にさせていだきたいと思いました。」「岡本さんの講演では、子ども同士の関わりをつくるうえで大切なことを、学んだ。それは、関わってよかった、

嬉しいという経験を保障するということだ。また、それをやらせるだけでは意味がないということもその通りだと思った。関わることの良さや価値を子どもにも伝え続けることも必要だと感じた。国語の授業の板書や発問もとても参考になった。」

有名講師の知名度で拡散・組織する集会ではなく、自分の関わる職場・同僚に地道に声をかけていく手づくりの集会づくりができたようにも思います。

集会の後嬉しい出来事がありました。集会に参加された方が4月の例会に来てくださり、私たちのサークルに入ってくださいることになりました。これも手づくりの集会の成果です。金井先生や図書先生からいただいたお菓子をつまみに早速ミニ歓迎会をしました。5月には、大々的に集会ご苦労様会&大歓迎会を行う予定です。春日井学力研も10名になりました。何とも嬉しいことです。

春日井学力研は、これからも春日井に根を張ってがんばります!!

「学力研・新学期スタート講座」のまとめ

大阪 吉田雅直

講座①

「できた！楽しい！学力づくり」

講師 岸本ひとみ 先生

「簡単なことを、毎日コツコツ、楽しく」実践する。それが「読み・書き・計算」なのだという学力研の基本を再認識することができた講座でした。「どの子も伸ばす」とは「発達保障」であるということ、特別なことはしなくていいので、日常の学習の中の配慮が大切であること、そのためには、クラスの子どもたちの学力の実態調査が大前提であることなど、日々の業務や行事に追われる中で忘れてしまいがちになる一番大切なことに気づくことができました。子どもたちの学力をつけることで保護者の信頼を勝ち取り、教師が楽になるという好循環を実現させたいと前向きな気持ちになる素敵な講座でした。

参加者の感想より

音読・基礎計算が大切なのだと思えて感じました。「できたー」という経験が子どもたちを支えるのだと思いました。

授業と学校生活が密接に結びついていることを改めて感じました。日々の授業の中での声かけや指導の積み重ねが子どもたちの生活態度や学校のきまりを守ろうとする意識に大きく影響するのだと学びました。

音読を大切にしたいと思っていたけれど脳があればど働いているとは知りませんでした。

実態調査、大事だと思えます。そのあと日々鍛えていくことが少しずつ力をつけていくと思います。「闇練」面白いですね。すきま時間を大切にしたいです。

講座②

「一年間を支える四月の授業の組み立て方」

講師 荒井賢一 先生

はじめに、「一年間を通して守らせたいこと」を参加者全員で考え、交流しました。途中でルールを追加したり、変更したりすると子どもたちが混乱したり、不信感にもつながるので、はじめに理由も含めてしっかりと示し、一年間声をかけ続けることが大切だということがわかりました。「ふきげん」を「ごきげん」に変える方法も興味深く、「ごきげん」な教師でいることが、「ごきげん」な子どもたちや学級づくりにつながるのだと感じました。「今の能力でできそうな課題」を徹底し、どの子も確実にできるようにしつつ、「背伸びしたらできそうな課題」に挑戦させ、自信をつけさせることで「できそうにない課題」にも取り組める「強くたくましい子ども」を育てることができるといってお話が残りました。まずは「一年間を通して守らせたいこと」をリストアップし、「やさしいことを徹底させる」を実践していきたいと思いました。

参加者の感想より

・ 一年間ぶれない自分でいくために四月の出だしをしっかりと考えておくことが大切だと思いました。自分の芯を今年はどうするのか、どの学年を持つのかに合わせ子どもも考えて、しっかりと考えようと思います。「ヒヤリ・ハット」楽しかったです。

・ 一年間を通して守らせたこと、とてもわかりやすく、自信につながりました。九月に確認して仕切り直し、すごくいいなあと思いました。

・ 荒井先生の授業は、みんな前のめりで聞いているのだらうなあと想像しました。易しい発問・指示でつないでいける授業を考えていきたいです。

・ 一年間を通して守らせたことを四月に徹底させることの大切さがよくわかりました。子どもたちに押しつけるのではなく、「なぜそうするのか」を語ることと、授業の中で実践させるということがよかったです。

講座③

「言葉が学級を育てる」言葉をつながり、自分で考え、みんなで伸びる学級づくり」

講師 岡本 美穂 先生

一番大切なことは「この一年、何を大事にするか」ということを言語化し、学年で共有することだというお話から始まりました。学年目標も、教室に張りっぱなしの「飾り」にするのではなく、ことあるごとに「できているか」「それでもいいのか」と子どもたちに問い続けることで、生きた「目標」になるというお話が心に残りました。最初の三日間で「できた」という「信頼感」を、一週間で「わかった」という「安心感」を、一か月で「つながった」という「期待感」を育てるといふ見通しには説得力がありました。「意味を持ってやるから自信につながる」「大事なことは言葉にして伝え続ける」という姿勢は、どんな学校に行っても、どの学年のどんな子どもたちを持ってても、教師を続けていく上でずっと大切にしていきたい言葉だと思います。「ことば」にこだわることの大切さを再確認できた講座でした。

参加者の感想より

・ 岡本先生が大切にされている核の部分聞くことができて参考になりました。学習のなかで学級づくりを進めていく工夫を知ることができてよかったです。

・ パワーアップ計算、特別支援学級で九九で作ってみようと思います。学校が安心できる場所となるよう、がんばっていきます。「うそテスト」おもしろいです。

・ ICTの時代ですが、やはり書くことを大切に私もしたいなと思います。音読に板書に、よくばりになってしまいかもしませんが、どちらも力を入れたいです。

・ 去年も学年目標を作ったのですが、そこに振り返る機会が少なかったので、今年度は学年で共有できる機会を増やそうと思いました。

・ 言葉、大切にすね。日々の言葉を大切にすることが学級経営に関係するの心から思いました。すごくありがたい講座でした。

教科書「を」と「で」で教え・学ぶ 社会歴史授業 二

第二時間目「大昔のくらしとくにの統一」

学力研常任委員 深沢 英雄

一、大昔のくらしとくにの統一

大昔のくらし、日本文教出版六十八ページから七十一ページでは、「大昔のくらしをしてきたのだろう」ということで、縄文時代と弥生時代の想像図を比較して調べたいことについて話し合い学習問題をつくるようになっていきます。最近の教科書の単元の導入はこういう形式になっています。この学習で一時間とっています。

れんさんのノートというモデルを示し、人物（服装・食べ物）、建物（住居、その他）、道具、その他

	想像図①	想像図②
人物	服装 白い服・アグセサリー	色のついた服装をしている人もいる。
食べ物	動物・魚・木の实・くだもの・保存食	
建物	住居 三角の建物	木でつくられている。
	その他 倉庫・見はり台	さく・宮殿のようなもの・見はり台
道具	木の船・弓矢・かご・火・火のついた土器	はた織り・火・きね・うす・土器・武器・土器
その他		落とし穴のまうなもの

4 れんさんのノート

という表です。たった一時間でここまですべての子どもができるとは思えません。歴史の導入では、どの子どもでもできて、おもしろいもつと調べようという気持ちになれる授業にしたいものです。

二、授業構成

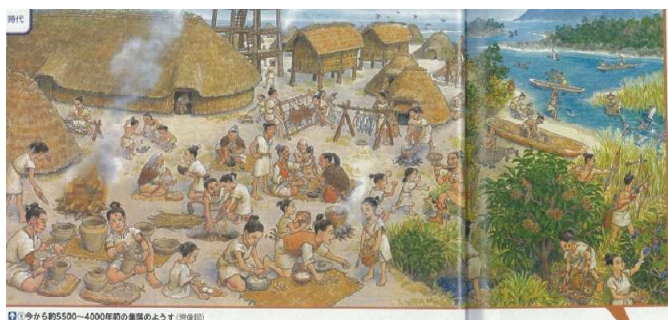
歴史の活動では資料をどう読み取るか、その学習能力を育てていきます。そのためにはスモールステップが重要です。縄文と弥生を比較して、その上、六項目にまとめることは至難の技です。六年生の終わりに、できることをめざしたいですが、一度にそこまでいきません。

授業ではこうやってみました。

三、授業の流れ

前日に予習のやり方について話をします。「明日は、縄文時代について勉強します。縄文時代(今から約5500〜4000年前の集落のようす、想像図)の絵図を見て、

気がついたところ・疑問を見つけましょう。ノートをあけてみましょう。今からやってみましょう。(少し時間をとります)では、残りは家で学校で気づかなかったところが見つかったら、ノートの続きに書いてきて下さい。こういう学習を予習といいます。今日は、学校で少しやりましたが、これを家でやれるようにしていきます。



今から約5500〜4000年前の集落のようす(想像図)

◎教師○子ども

◎昨日学校や家でやった想像図を見て、気がついたところ、疑問に思ったところを発表しましょう。

○子ども数人、発表

◎たくさんのことに気づいたり疑問を見つけてましたね。発表してくれた中に食べ物のごとがありましたね。今日のめあては、「大昔（縄文時代）の人々はどのような暮らしをしていたのだろう。」です。今日は、食べ物から大昔の暮らしについて考えていきましょう。

教科書の想像図の食べ物に○をつけて発表してもらいます。その後、班にくぼる紙に班のみんなの意見をまとめて下さい。

（発表タイム 黒板に書いたものを貼って、同じ食べ物とまとめて、内容によりグループ・ピングしていきます）

狩猟（狩り） くシカ、鳥、イノシシ

採集（くり、木の实

漁ろう（海・川） く川の魚、貝、海の魚

◎たくさん見つけてくれました。海の魚みなさんタイを食べたことありますね。タイの

大きさを手でやってみてください。そうですね。それぐらいです。三内丸山遺跡からタイの骨も見つかっていて、これぐらいのタイの骨もでてきます、

● 一m級のタイの絵を見せる。

● クリ、シカ

◎食べ物をたくさん見つけてくれました。三内丸山に住んでいた人が食べていたものがまだあります。この絵図の中に書かれています。班の形にしてください。（教科書の絵図を拡大したものを配ります。大きくすることで見つけやすくなります。）分かった班は手をあげてください

○犬

◎縄文時代には犬は狩猟の手伝いをするので食べてはいなかったようです。

※子どもは見つけることができます。

◎「これです」と示します。ここにいます。なんだか分かりますか？



○リス？

T・ムササビなんです。はっきりと分かりにくいですが、ムササビではないかと思えます。パワポ（絵）を見せてください。ムササビの骨が三内丸山遺跡からたくさん出ています。

◎今、みなさんがまとめてくれた食べ物を「とったり、食べやすいよう調理にする」には道具がいりますね。みなさんは調理実習をした時に野菜を切る時に何を使いましたか
○包丁

◎そうですね。包丁は調理の時に使う道具。大きな絵図には、とるための道具、調理のための道具が描かれています。探してください。班で相談して、今から渡す画用紙に書いてみてください。あとで発表してもらいます。書いたら、食べ物をとるための道具は「赤」調理のための道具は「青」の印をつけます。調理の道具は「青」で○で囲んでください。※「石の道具 骨の道具」（角・やじり 黒曜石）教科書に掲載写真で確認します。出黒曜石が手に入れば、黒曜石で紙を切ってみせると子どもたちは喜びますし、興味を持ちます。

◎教科書を読みます「今から1万2000年前ほど前から人々は貝や木の実を集めたり、シカやイノシシなどの動物や魚などを、石や骨などでつくった道具でとったりして、食料とするくらしをはじめました。」

これを木の先につけて、弓矢で動物をしとめる。でもこれって便利だけど、危ないね。人におけると何になる。

○武器

◎縄文の人は、どうしてたと書いてある？

◎武器は見つからないので戦いではなく、自然に合わせて暮らしていた。

◎教科書「また、この土地ではとれない黒曜石などの加工品が多く出土していることから遠方との交流もあったと考えられます。」

◎画用紙に書かれているものの中に縄文人のすごい発明があります。どれでしょう？

○土器

◎縄文土器は大発明です。教科書を読んでみましょう。「狩りや漁をしていたころの食事土器の発明で、にたりたいたり(2ー)できるようになり、料理方法も変わり、食べられ

るものの種類も増え、人々の食生活が、より安全で豊かなものになりました。」

◎この土器は、縄文時代のどのあたりで発明されたのかな。班で相談してください。決まったら、ポストイットはってください。ここだとこの印をつけてください。(一時間目の使った年表にはりつけます)

◎正解は、教科書にあります。どの言葉ですか？

「1万2000年ほど前から・・・くらしをはじめました。」同じころ人々は、食べ物にたきしたり、たくわえたりするための土器をつくりはじめました。この器は、縄を転がしてつくったもようが多いので、縄文土器といえます。」

◎教科書の言葉のどの言葉が正解を教えてくださいますか。

◎そうです。「同じころ」という言葉です。「何と同じころか？」今から1万2000年

前と同じこと「教科書は今の時点で正解ではないかと考えられる言葉を使って書かれています。教科書の言葉をじっくりと読む、習慣をつけていくことが歴史の勉強だけでは

なく、大切です。でも新しい説がでると教科書の内容は変わります。

◎縄文土器を使い始めた時からが、縄文時代なんです。教科書「このように、縄文土器と使っていた時代を縄文時代といいます。三内丸山遺跡は、この時代の遺跡です。」

学校の資料室に縄文土器のレプリカがあれば見せる事で子どもは興味を持ちます。

※この後、貝塚について説明します。日本文の教科書には、加曾利貝塚が載っています。縄文人の一年のくらしの円グラフも取扱います。

※縄文時代を身近に感じてもらうには、地域の縄文遺跡を調べておいて、

◎皆さんがすんでいる市町村(都道府県)に、縄文人は住んでいましたか？と聞きます

一、いた。二、いなかった。

都道府県のレベルだと縄文遺跡はほぼどこでも見つかっています。その後に、各地域の遺跡を紹介するのもいいと思います。

「先生のための学校」誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋 2026 5

教師の権能の復権

大学卒業してから半世紀、今も現役で担任を続けている学力研のレジエンドが次のように話してくれた。

「今が教師をしていて一番面白くない。教師はもつとクリエイティブな仕事なのに。これでは教師になろうという人がいなくて当たり前、子どもにあった創意工夫なんてなにもできない」

話の身をまとめると、学年ですべてのことを合わせようという学年主任らしい。このような傾向はどこでもあるらしいが、これまでは学校権力すなわち、校長からの指示であったが、今は学年での同調圧力、学年主任の責務と思い込んで行われているとのことだ。賢い学年主任のところではそれぞれが自分の意見を出し合って、合わせるところは合わせる、個性を発揮するところは個性を発揮するという具合で、具体的レベルでの同一では

なく高いレベルでの一致で進められるが、愚かな主任のところでは具体での同一のみが指標となるため、クラスにあった取り組みはほとんど不可能になるということだ。こんな悪しき傾向を増殖させれば教育は死んでしまう。

個別最適化からクラス最適化へ

教諭は本来、指導要領と教科書に則って教育を司るから、それを逸脱しない限り、むしろそのクラスの実情にもつともふさわしい方法や順序で教育をする責任がある。

クラスの教育の責任は担任にあるのであって、学年にはない。したがって教材選びは教育を司る担任がクラス最適化されたもの、あるいはその担任が教育しやすいものを選ぶべきだ。

ある学校へいったら1年から6年まですべてのノートがマスだった。教科書に載っているノート見本がそうだから全国的にそうになっている。しかし、私の実践では子どもの

発達によって、マス↓罫線↓白紙と進むことによつて子どもは白紙でも真つ直ぐに字が書ける能力を身に着ける。こんな教育の常識が学校教育では不可能になっているだけでなく、教諭自らがその教育的権能を放棄している。そしてこの放棄は伝染し教諭自らの権能を自ら破壊することになる。

クラス最適化を担当がそれぞれ認めあうことで教育をクリエイティブなものとして残すことができる。

親と連帯して学力を保障する権能

この半世紀、権力側が最も力を入れてきた取り組みが二つある。一つは労働組合つぶしであり、もう一つは親と教師の連帯を阻止することだった。そのやり玉の一つが「学級通信」の阻止であった。私は新採の時から学級通信「やんちゃ」を出し続け、毎日のように書いていた。ある時から管理職の点検が入るようになり、ついには週一回半ページしか許されなくなった。それでも、私は教育を司る教諭にとつて親との連帯は不可欠と考えていたので、学力づくりだけに限定し、学習内容を伝え、今のクラスの学習課題を親に知ら

せ、ともに学力づくりで連携するということ
で理論武装して管理職を論破し、続けること
ができた。

『宿題と学級通信は親に教室をのぞいても
らう窓』ととらえ窓を大きくクリーンなもの
とすることで親との連帯をはかった。

学習内容を親に知らし、子どもの学力づくり
で連携する権能を教師はもつともつと発揮
すべきだと考える。今こそ教師は学力づくり
で親と連携する教育の専門家として立たな
ければ、教師はとてつもなくつまらない仕事
になって、クレームにおびえるだけの存在
になってしまう。

学力で打って出ること教師は輝くし、クレ
ームを傘下におさめることができる。

カリキュラムマネジメントは文科省が

認めた教師の権能だ

デジタル教育とアナログ教育を二項対立
で論じるのは意味がない。なぜなら両方必要
だからだ。問題はそこにはない。問題は一般
論ではない。初等普通教育においてこの二つ
をどのように並べるかということだ。子ども
の脳の発達の見点から初等普通教育である

小学校ではどのようなように、カリキュラムマネジ
メントすべきかという問題だ。

その意味で今の状態は最悪と言える。文部
省が何の十分な研究をすることもなく通産
省のいいなりになって、学校現場に押し込
みだからだ。

デジタル、アナログ分離カリキュラム

今はつきりと分つてきたことがある。それ
は今までの紙、鉛筆のアナログ教育をデジタ
ル教育に置き換えることはできないという
ことだ。すなわち、デジタル教育はアナログ
教育で培った教育の上に付加されるべき内
容のものであるということだ。

こんなことは教育の常識だけれど、教育現
場ではアナログとデジタルが混在している
ことがトレンドイのように受け止められて
いる。

学校現場ではタブレットで調べる子、アナ
ログで調べる子、それはそれぞれの子によっ
て偏りがあってよい。それが自由であり個性
だとうそぶく先生がいて驚く。では一年生の
子どもが紙、鉛筆を一切使わずに二年生にな
ったら、それでも良いというのだろうか。

それはちよつと困るというのならその根
拠は何なのだろうか。

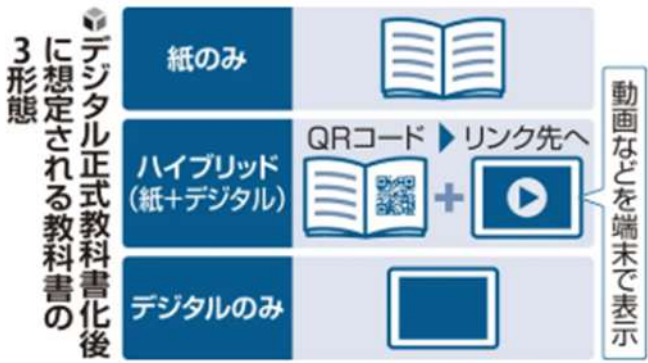
初等普通教育ではアナログ教育でしっか
りと手や目や耳や脳を鍛える必要がある。

4年まではしつかりとアナログ教育で板
書を写し、ノートを取り、作文を書き、絵と
文字で新聞を作り、視写をし、聴写もし、ロ
ーマ字も書き、すべての課題をデジタルに置
き換えることなくやらなければならない。も
しその一部でもデジタルに置き換えればそ
れは能力として子どもたちの脳に欠損をつ
くることになる。それを親も教師も子どもも
気づかないし、指摘もされないけれど大きな
問題である。

では低学年のデジタル教育はどうすべき
か。それは何かタブレットだけを使う時間を
つくり、全員がタブレット操作だけを行う授
業を「デジタル時間」として行うことで実現
するのが最適だといえる。

4年まではデジタル教育とアナログ教育
を完全に分離するカリキュラムが教育的に
は最も妥当は教育課程と言える。

◇学力研最新情報 岸本ひとみ
●教科書の行方



デジタル正式教科書化後に想定される教科書の3形態

教科書は検定申請を受け付けない
Ⅱ紙版で確定、ということのよう
です。

2030年度からのことですか
ら、教科書会社は紙版で、従来通
りの検定本を制作することになる
でしょうから、全デジタル化はほ
ぼないと考えていいでしょう。

●「教科書とノートで

どの子も伸ばす」の意義

文科省の方針から考えて、今夏
の全国フォーラムのキャッチコー
プが、がぜん目を引くことになり
そうです。新井紀子さんの講演も
もちろんですが、デジタル化に対
して苦い思いを持っておられる方
にとっては、午後の各学年の講座
も、自信を持っておすすめできま
す。

ぜひ、ノート指導や、子どもた
ちと教師のやりとりで深めていく
授業のあり方などについて、共に
学びましょう。6月には、大阪府
と兵庫県には研究会案内を送付し
ます。参加申し込みはお早めに。

4/25付読売新聞に掲載され
た記事です。教科書のデジタル化
は、小4年以下は適当ではない、
という方針が文科省の有識者会議
が示した指針だそうです。国語、
社会科、道徳は全学年でデジタル

◇事務局だより 岡本 美穂

●春の先生のための学校

新任の方、若手の先生、ベテラ
ンの先生、どんな先生にもご参
加いただけます。

前回の感想です。

・漢字は「使えるようにする」
がゴールだと改めて思いまし
た。以前は、きれいに書かせる
ことばかりに注力していました
が、それだと書写になってしま
うなど最近気づきました。リス
ム漢字も言葉集めも積極的に実
践していきたいです！ありがと
うございました。

・ありがとございました。様々
な観点でお話しいただき勉強に
なりました。また明日からの実
践に生かしたいと思います。ミ
ニゲームなど、自分の引き出し
が少なく、「隙間時間何かできる
ことがあれば助かるな」と思
っていたので、さっそくやっ
てみます。

・学習活動の隙間時間に脳下し
的なアクティビティとしてゲー
ムを入れると学習の活性化と学
級の柔らかな雰囲気づくりにい

ですよね。心地よい刺激をいた
だきました。テンポ良くリズム
よく、を心がけたいと思います。
やりたくない子がいてもいいで
すよね。今日も沢山の学びをい
ただきました。漢字の復習やま
とめ、そして着実な習得に力を
入れていきたいと思えます。読
めること、ですよね。教科書も
必ず音読をさせる、実践して参
ります。

・宿題で復習する理由として、
忘却曲線の話をするのほいいな
あと思いました。夏休み後半に
全く学習しないとすっかり忘れ
ているという経験をしたことが
ありました。

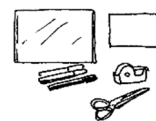
▼春の先生のための学校
第3回

5月17日(日) 13:00～15:00

1か月たったの学級づくり
子供が楽しんで取り組む書く指導
学級会で自治
保護者対応 どうする？
自治に向かう！話す聞く指導とは
困っている子供対応 Q&A講座

https://www.kokuchipro.com/even
t/2536359383c295511daa394d916e
def8/

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2026年 5月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お問い合わせのうえお越しく下さい。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

5/

23 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

29 (金) いろえんぴつ 18時～ コミュニティーセンターおおべ 岸本 090-9117-6330

30 (土) 春日井学力研 11時半～ 場所未定です。お尋ねください。 山口 080-6904-1697

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等にご連絡ください。

- みなみ学力研 9時45分～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp
- 伊丹学力研 18時半～ 伊丹市役所横サイゼリヤ 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

○ 春の先生のための学校【オンライン：会員限定】

3月22日(日)【済】 4月12日(日)【済】 5月17日(日) 【3回講座】

○ 学力研 1年生講座 5月30日(土) 13:30～14:30 オンライン

● 学力研 全国フォーラム 8月1日(土) 9:45～ 1日集会 エルおおさか

- 記念講演 新井紀子氏
- ・ 実践報告 岡本美穂
- ・ 学年別講座&分科会

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp

李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com

堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com

古東 秀一 E-mail kohigasi1201@gmail.com